

景気討論会 レポート 2023

APIRフォーラム

一般財団法人 アジア太平洋研究所
ASIA PACIFIC INSTITUTE OF RESEARCH

概要 日時 2024年1月25日(木)10:00～11:30
会場 対面:グランフロント大阪北館タワーC8階
ナレッジキャピタルカンファレンスルーム Room C04
オンライン:Zoomウェビナー

第1部 基調講演 「関西経済の短期見通し」
入江 啓彰 氏(近畿大学短期大学部商経科 教授)

第2部 パネルディスカッション
パネリスト 齋藤 元彦 氏(兵庫県知事) 入江 啓彰 氏(近畿大学短期大学部商経科 教授)
モデレーター 稲田 義久(アジア太平洋研究所 研究統括兼数量経済分析センター長/甲南大学 名誉教授)

第1部 基調講演

関西経済の短期見通し

近畿大学短期大学部商経科 教授
入江 啓彰 氏



1. 関西経済の現況

APIRでは、最新の関西経済の見通し、見立てを「緩やかな回復続くも局面変化の気配」とみています。関西経済は、コロナ禍からの回復もあり、しばらく緩やかな持ち直しの動きが続いていましたが、足下、悪化を示す経済指標も散見され、局面変化の兆しが見られています。コロナ禍収束に伴う景気浮揚力は剥落し、もはや「コロナ後」ではない。今後の景気の先行きは不透明であると見ています。

悪化を示す指標として、内需については、賃上げが幾分進んでおり、名目賃金はゼロより上に行っていますが、物価上昇はそれを上回っており、実質賃金はマイナスが続いている状況です。有効求人倍率については、コロナ禍で落ち込み、2020年後半から徐々に回復してきてはいたのですが、23年からはコスト高により企業が求人を控える動きが出てきて、やや横ばい、むしろ悪化に向かっています。

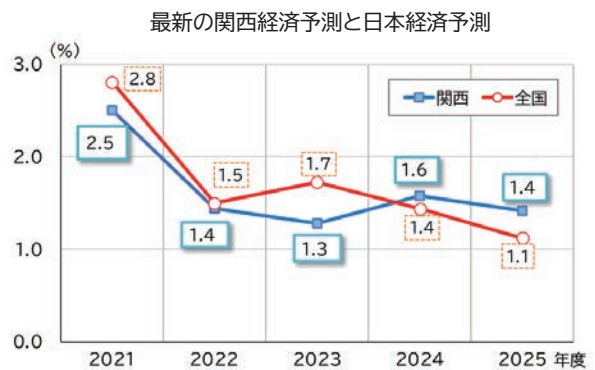
外需については、財の貿易、輸出もあまり良くありません。輸出の伸びが関西は全国よりも良くない状況にあります。その背景には、全国よりも関西の方が中国向け輸出のウエートが高いことがあげられます。中国経済の減速を受けて中国向け輸出が伸び悩んでいることから、全国よりも関西の方が若干厳しい状況になっています。

一方、開空から日本に入ってくる外国人客数は、顕著に回復しています。ただ、インバウンドは、経済全体に占める割合で言うとそれほど大きいものではありませんのであまりプラス材料とはならず、内需の弱さ、輸出の弱さを考えると、景気の浮揚力は弱いと言わざるを得ません。

2. 関西経済予測

このような状況を踏まえ、APIRでは関西の実質GRP成長率を23年度+1.3%、24年度+1.6%、25年度+1.4%と予測しています。

24年度、25年度は関西経済の予測の方が全国を上回る予測になっていますが、これは万博ブーストが要因になっています。設備投資を中心に、民間需要、公的需要が全国に比べて伸びるという見立てになっています。ただ、全国を上回る成長率とはいえ、長らく続いている関西経済のシェアの停滞を反転させるにはいたらず、万博ブーストをできるだけ長期にわたって発揮していく必要があるのではないかと思います。



出所: APIR「Kansai Economic Insight Quarterly」No.67

次に、兵庫県に着目してみると、府県経済は全国のGDPに比べて2～3年遅れて発表されますが、兵庫県は47都道府県中唯一、四半期別GDP速報値を公表しており、そのラグがほぼない状況になっています。

それに基づいてコロナ禍からの回復を見てみますと、兵庫県は全国に先駆けて22年度にはコロナ禍前の水準を回復していたと見られます。23年度に関しては、関西、兵庫とも若干足踏みという状況を予測しています。

第2部 パネルディスカッション

パネリスト

兵庫県知事
齋藤 元彦 氏

近畿大学短期大学部商経科 教授
入江 啓彰 氏

モデレーター

アジア太平洋研究所 研究統括兼数量経済分析センター長／甲南大学 名誉教授
稲田 義久



稲田 齋藤知事を迎えて議論を展開していきたいと思ひます。

キーワードは「拡張万博」です。万博のテーマ・時間軸・空間軸の概念を拡張し、関西全体を仮想的なパビリオンに見立て、万博会場では実施しにくい事業も含めてさまざまな経済活動を展開する取り組みと定義しています。

大阪・関西万博として拡張万博を成功させることが、万博の価値向上につながると考えています。府県が主体となった拡張万博の取り組みは、兵庫県が最も進んでおり、「ひょうごフィールドパビリオン」という形になっています。一体これは何なのか、まず齋藤知事にご説明いただき、議論を展開したいと思ひます。

「大阪・関西万博」に向けた兵庫県の取り組み

齋藤 元彦 氏(兵庫県知事)

齋藤 あらためて1月1日の能登半島での地震の被害に遭われた方へのお見舞いとお悔やみを申し上げます。関西全体で石川県の支援をさせていただいているところ。阪神・淡路大震災が1月17日で29年になりました。万博の年が30年という節目の年に当たり、震災からの復興、防災力の強化ということも、この拡張型万博の中で兵庫から発信していきたいと思ひています。



兵庫にとっての万博の意義

私が知事に就任したのが2年ほど前になりますが、就任早々からこういうことをしたいと思ひていました。21世紀型の万博は人類共通の社会課題の解決策を提示する場になっています。

これからは、既存の施設や取り組みをネットワーク化し、それをある種のパビリオンやソフトと見なしてプレイアップしていくというあり方がトレンドなのではないか。そう考へて2年前から準備を進め、「ひょうごフィールドパビリオン」ということで展開させていただいています。

兵庫にとっての万博の意義 3

- 兵庫では、歴史も風土も異なる個性豊かな五国において、地域の人々が主体的に課題解決に取り組み、未来を切り拓いてきた
 - ・ 震災からの **創造的復興**
 - ・ 人と環境にやさしい **循環型農業**
 - ・ 豊饒な大地や海に育まれた **食材**
 - ・ 挑戦を繰り返してきた **地場産業**
 - ・ 郷土の自然と暮らしの中で受け継がれてきた **芸術文化**
- こうした取り組みには、世界が持続可能な発展を遂げていくための**多くのヒント**が秘められている

大阪・関西万博は、兵庫の取り組みを国内外に伝えるチャンス

兵庫県は、歴史、文化、風土が異なる五つの地域からなります。北は日本海側から南は淡路まで、それぞれの地域のプレーヤーで

ある人々が、主体的に社会課題、そして自らの産業の持続可能性などに取り組んできたところ。播州織や淡路の線香といった地場産業、あるいは農業もそうですが、少子高齢化で厳しいといわれる中でも何とか将来につないでいこう、持続可能な形でイノベーションしていこうという挑戦を、本当に歯を食いしばりながら生き残りをかけて取り組まれています。

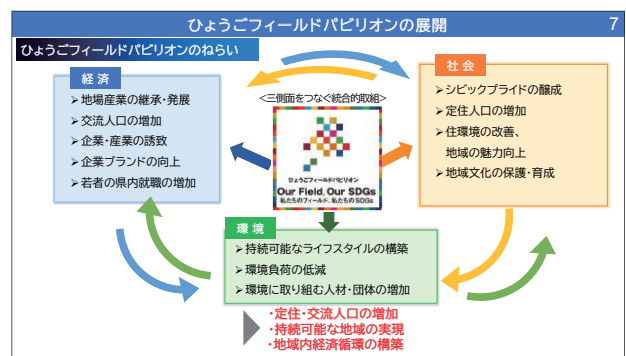
この問題は、日本が恐らくフロントランナーになります。その解決策を兵庫から世界の国・地域へ発信していきたいと思ひます。

「ひょうごフィールドパビリオン」の展開

私がこの構想を打ち出したとき、誰も理解してくれませんでした。今では200近いプレーヤーのみなさんが、エントリーしてくださっています。一人一人にお話を聞くと、万博を数年後に控え、自分たちの取り組みが世界の社会課題の解決策になるということを発信していくコンセプトに、大いに共鳴して集まってくださっています。プレーヤーのみなさんは今、兵庫県と一緒に、燃えるような思いでプログラムの磨き上げなどをおこなっているところです。

われわれが「ひょうごフィールドパビリオン」の取り組みを地道にやらせていただいていたところ、社会や産業発展、地域の持続可能性を目指していくSDGsの取り組みとして国に高い評価をいただき、令和5年度の「SDGs未来都市」に選定されました。専門家や有識者の方から、万博会場での発信も大事だが、兵庫の取り組みのように、会場の外につなげ、地域の交流人口の拡大やさらなる経済の活性化につなげていくことが本当に大事だという高い評価をいただきました。

コンセプトは、経済・社会・環境の三側面をつなぐ、「三方良し」の取り組みにしたいということです。経済面では、多くの方々に来ていただければ、兵庫各地の地場産業や、過疎化・高齢化に悩む地域の活性化につながりますし、例えばSDGsを含めて環境面への負荷の低減にもつながっていく。さらに社会面では、兵庫県で暮らしている方、特に子どもたちに、自分たちの地元でこんな素晴らしい取り組みをしているということを知っていただく機会にもしたいと思ひています。それがふるさとを誇りに思うシビックプライドにもつながり、定住人口の加速にもつながるのではないかとと思ひます。



これから大事なのは、「ひょうごフィールドパピリオン」を知ってもらい、国内外から多くの方に来ていただくことだと思っています。私自身も認定したプログラムを体験してPRしていきたいと考えています。

また、最近では欧米のみならず日本を中心に、日本に来るときには体験などによって精神的な充足感を得る、いわゆるマインドフルネスというものが求められる傾向が強いです。五感に働きかけるような体験型のプログラムを提供し、それをきっかけに新たな観光プログラムの開拓にもつなげていきたいと考えています。

兵庫県の万博開催期間の取り組み

万博期間中、兵庫県の取り組みは大きく五つのポイントがあります。一つは関西パピリオンの兵庫県ゾーンではアトラクション型で兵庫県の魅力を映像で体験してもらう「HYOGO ミライパス」を出展します。

そこから兵庫県にいざなう一つのフックが「FutureHYOGO」です。HAT神戸の近くにある県立美術館で、参加型の展示体験でわくわくしながら兵庫の魅力を発見し体感いただき、さらに県内に展開していきたいと思っています。

それ以外にも、「リージョナルデー」という地域からの発信を行う市や町の日、兵庫県版のテーマウィークの設定、兵庫県の子どもたちが万博に参加できる「子どもの夢プロジェクト」など、「観に行く万博」から「参加する万博」へと位置付けて、さまざまな取り組みを進めていきたいと考えています。

「兵庫県版テーマウィーク」は、万博協会の八つのテーマに兵庫県ならではの二つのテーマを追加して開催するものです。特に、万博が開催される2025年は震災から30年ということ、また今回の能登半島の大きな地震も踏まえ、災害に対する強い社会と創造的な復興をどのように達成していくかということ、あらためて国民のみなさま、世界のみなさまが感じたり考えたりする機会として、「災害からの創造的復興」というテーマウィークを、兵庫県独自でぜひ開催したいと考えています。

「創造的復興」に関するイベント

また、「創造的復興サミット」を開催したいと考えています。阪神・淡路大震災の後に起こった大きな地震で被災した岩手、宮城、福島、熊本、さらに海外に目を向けるとトルコ、そして災害だけではなく戦禍からの復興ということでウクライナも含めて、多くの関係者、首長のみなさまにぜひ集まっていただきたいと考えています。

「創造的復興」というのは阪神・淡路大震災のときに生まれたコンセプトで、災害前の元の姿に戻すのではなく、より良い社会をつくっていかうという考え方です。これが東日本大震災、熊本地震、そして国連の防災計画にもビルドバックベターということで位置付けられ、災害からの復興の普遍的な理念になっています。実はこれが兵庫から発信されてスタートしたということ、ぜひ万博の機会にテーマウィークで発信し、知っていただきたいと思っています。

子どもの夢プロジェクト

次に、未来を担う子どもたちに万博を体験し、参加してもらいたい

のが、「子どもの夢プロジェクト」です。万博会場に行ってもらうことも大事ですが、兵庫ならではの万博に子どもたちが主体的に関わって、みんなで一緒に何かを創り出していくことを、行いたいと考えています。

子どもたちが描き、創り上げる「未来のまち“兵庫”」、絵画の作品を募集したり、子どもたちがフィールドパピリオンをはじめとする各地域の魅力を調べてショートムービーにしたり、さらには兵庫のシンボルであるコウノトリの折り紙をみんなで作って会場に吊り下げたりと、子どもたちにも参画してもらって一緒に創り上げていくプロジェクトを、ぜひ展開していきたいと考えています。

生成AIを活用し五感で表現するプロジェクト

そして、AIを活用して五感で表現するプロジェクトです。フィールドパピリオンや兵庫の展示ブース、子どもの夢プロジェクトなどで、子どもたちやそこに参加していただいた方々に見て、感じたことをメッセージにして投稿していただき、そのメッセージや言葉を全部集めて生成AIにかけて、五感に訴えるものをアウトプットしたいと思っています。

兵庫県と近隣府県等との連携

関西広域連合の構成府県市と連携して関西全体の発展に向けた取り組みを推進していきます。既に香川県とは万博と瀬戸内芸術祭との同時開催を契機とした連携を計画中で、新潟県はトキ、兵庫県はコウノトリという絶滅した野生生物を復活させ野生に復帰させるという共通のプロジェクトや、それを米のブランディングにつなげていくという共通の取り組みがあるので、万博を機会に共通の地域資源を活用した連携を図っていきます。まずは、万博会場から「ひょうごフィールドパピリオン」につないでいき、グローバルに、もっと拡張型万博を広げていきたいというのが私の強い思いです。

まとめ

「ひょうごフィールドパピリオン」を核として兵庫県のさまざまな取り組みを、万博のテーマであるSDGsと絡めて発信することを2年間かけて行い、拡張型万博の準備をし、かなり花開いてきたところ。それぞれのプロジェクト、コンテンツにぜひ足を運んでいただければありがたいと思います。

稲田 今日のパネルディスカッションは三つの論点で進めていきます。

論点1は、拡張万博に向けた兵庫県の取り組み「ひょうごフィールドパビリオン」について少し深掘りしていきたいと思います。論点2は、「兵庫県地域内経済の構築」に向けてより広く議論を進めます。論点3は、拡張万博が「関西経済の好循環」につながる可能性について、深掘りしていきたいと思います。

まずは、大阪・関西万博に対する齋藤知事の意気込みや思いをうかがえますでしょうか。



論点1 拡張万博に向けた兵庫県の取り組み

齋藤 大阪・関西万博は、関西全体を元気にしていく、活性化していくために本当に大事なイベントだと思っています。関西のみなさんはもちろん、国民全体で意識を前に向けてやっていくことが大事なのではないかと思っています。

特にわれわれは「ひょうごフィールドパビリオン」ということで、万博のエネルギーを兵庫県の中いかに取り込んでいくか。そして、そこに県民のみなさん、市民のみなさんが共鳴して、兵庫県にこんなすごいものがあるのだ、ということにあらためて気付く機会にしていきたいというのが、私の万博への強い思いです。

稲田 入江先生、齋藤知事のプレゼンや意気込みを聞かれて、何か気付かれたことがあればおうかがいできますでしょうか。

入江 齋藤知事のプレゼンで特に注目したのは、「子どもの夢プロジェクト」です。1970年の大阪万博のときも、万博会場で月の石や未来社会を想像させるような展示がありました。子どもたちがそれを見て自分は将来どうなるのかなと、夢見た子どもたちが多かったと聞いています。

今の小学生、中学生は、20年後、30年後には社会で活躍し、日本経済、関西経済を支える貴重な存在です。兵庫県では、今回の万博を契機として、子どもたちの夢、未来の兵庫のまちを万博で展示するという、子どもたちが参加して創り上げるプロジェクトを計画し、進められているということで、子どもたちや社会にとって良いことだと思います。次世代のためにこの万博をどう活かすのか、長期的な視野に立って万博を捉えておられることで、非常に大切な取り組みだろうと考えております。

稲田 先ほどの知事のプレゼンにも「シビックプライド」とありましたが、若い世代に対する思いを齋藤知事からお願いします。

齋藤 日本も先進国になって、成熟した社会になっています。その中で、空飛ぶクルマなどの新しい技術を見るということも大事ですが、それと

共に自分たちの地域や社会の足下にあるいろいろな問題、SDGsや持続可能な社会、環境問題、食糧危機、ジェンダーの問題、地域の地場産業の持続可能性の担保や、少子高齢化社会へのチャレンジといった万博と同じテーマ性を有する社会課題に対して、自分たちの地域や身近なところにその解決策となる、世界のモデルにもなるようなすごい取り組みをしているプレーヤーがいることを知る機会を、万博をきっかけにつかっていきたいと思っています。そして、万博を通じて、若い世代に自分たちの地域に対するシビックプライドを醸成していきたいと思っています。

子どもたちに「ひょうごフィールドパビリオン」の素晴らしさに気付いてもらう、そして新しいものだけでなく、古いものの価値にもう一度気付いてもらう、古いものの中にも新しい取り組みやイノベーションがあることを知ってもらう機会にもしたいと思っています。

論点2 兵庫県地域内経済循環の構築に向けて／拡張万博の経済効果

稲田 次に兵庫県内の地域内経済循環の構築に向けてという論点に移りたいと思います。APIRでは、足下のデータを更新して、大阪・関西万博の経済効果を発表させていただきました。

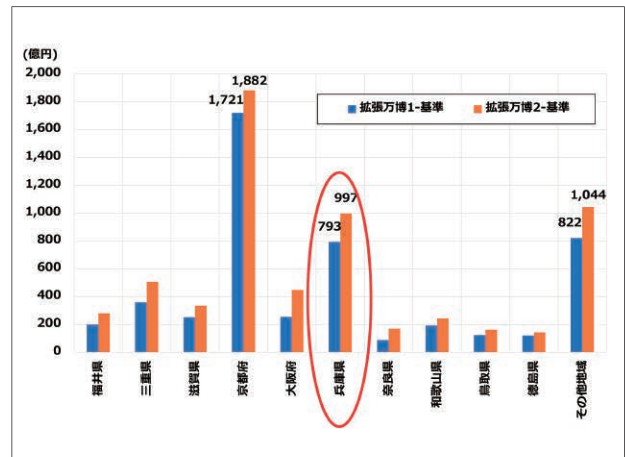
今回の万博は経済全体にどんな影響があるかという、万博関連事業と消費で2兆7457億円となっていますが、拡張万博をやれば3兆2384億円とか3兆3667億円になるわけです。

経済波及効果を各府県別に見ると、大阪は2兆621億円、兵庫は722億円になります。

先ほど大事なのは拡張万博だとお話しました。その拡張万博の効果を、万博会場の夢洲だけで行った場合との差で見ると、兵庫もケースによって793億円とか997億円くらいの上振れ効果が出てくるということです。

もう一つ、兵庫県は各地域にいろいろな観光資源があります。「ひょうごフィールドパビリオン」の展開において、いかに地域へ誘客するかが一番難しい課題だと思うのですが、海外の方々の万博および「ひょうごフィールドパビリオン」の認知度や期待について、お聞かせください。

府県別拡張万博の経済波及効果



齋藤 海外の方とは欧米でも話をさせていただきましたが、万博自体を知っている方もおられますが、認知はこれからと思っています。

なおさら「ひょうごフィールドパビリオン」も、初めて聞くという方が多かったと思っています。認知度をしっかり高めていくことが、大事だと思っています。

いかに具体的なツアーとして組み込んでいくかが、特にインバウンド誘客のポイントで、これからオンライントラベルなど、いろいろな海外向けのツアー造成をしっかりと行っていくことが非常に大事だと思っています。

特に、兵庫県には700億円を超える経済波及効果を、さらに「ひょうごフィールドパビリオン」で増やすことを目指していくことが大事だと考えています。万博に来られた海外の方々は、おそらく少なくとも1週間ほどは滞在されると思うのですが、そうすると京都や姫路城に行ったり、淡路や、有馬、湯村、城崎などの温泉地に行ったり、一般的な観光スポットに行く人が結構いるだろうと思います。それにプラスして、「ひょうごフィールドパビリオン」にも足を運んでいただき、製造業や農林水産業の経済波及効果をさらに伸ばしていきたいと思っています。それぞれのフィールドパビリオンがいかにツアーをパッケージ化して組んでいくかということがポイントだと思っています。

稲田 齋藤知事が、これまで「ひょうごフィールドパビリオン」を視察された中で、地域プレーヤーの方々からどのような意気込みを感じられたか、お聞かせください。

齋藤 「ひょうごフィールドパビリオン」には、現在180を超える方々にご参集いただいています。受け入れ側として紹介プログラムを分かりやすくすることや、多言語で提供できるようにするとか、体験型のプログラム、ワークショップなどをつくってもらうことが大事なポイントになると思います。実はその深掘りをするセミナーも順次、個別のプレーヤーの方々全てを対象にさせていただいています。

そこでの副次的効果として、プレーヤー同士のつながりができて、いろいろなコラボレーションの動きにつながっています。「ひょうごフィールドパビリオン」は万博に向けた取り組みですが、その後に異業種のプレーヤーのみなさんが、自発的につながって何か価値を生んでいけば、それが万博後のレガシーとなって、誘客や交流人口の拡大などにもつながっていく可能性が非常に高いのではないかと考えています。

稲田 拡張万博で、外国の方や関西以外の方に関西に来ていただき、周遊してもらい泊数が増える、リピーターが増えるということをお求めていきたいわけです。

そこで、「ひょうごフィールドパビリオン」を展開する中で、経済と社会と環境という三つの側面がつながり兵庫県内で好循環する点について、入江先生はどう感じられましたか。

入江 経済、社会、環境の好循環実現に向けてはいろいろ課題があると思うのですが、2点指摘させていただくと、1点目は、いかに認知度を高め、誘客していくのかということかと思っています。万博は大阪でやるけれども、その取り組みを兵庫だけではなく関西にも広げていくということを多くの人に知ってもらうことが大事で、それが定住人口、交流人口の増加につながっていくだろうと思います。

2点目は、地域ごとの課題をどう解決していくのかということで、地域ごとにロードマップをつくっていく必要があるのではないかと考えています。兵庫県は南北に広がりがあり、都市部も地方部もあり、非常に多様性がある県と言えます。それらが一体となって「ひょうごフィールドパビリオン」という形になっているのかなと思うので、地域

ごとの取り組みの進捗度合いなどのロードマップをつくり横串で見ることで、コラボの可能性が出てきて、経済、社会、環境の好循環につながっていくだろうと思います。

齋藤 本当に大事なポイントだと思います。一点目のポイントは、県内の若い世代、特に大学生にもっと万博、そして「ひょうごフィールドパビリオン」に関心を持っていただくことだと思います。兵庫県には多くの大学があり、学生数も日本でトップクラスですが、卒業すると東京に行ってしまうという。ぜひ学生に、兵庫にはこういう素晴らしいものがあるのだということに気付いてもらうきっかけをつくり、Uターンや定住にもつながってほしいと思っています。

それから、誘客という意味では海外を含めたインバウンド。兵庫は、大阪や京都に比べるとインバウンドはまだまです。兵庫県は神戸も含めて非常に住みやすいまちですが、もう少し来てほしいなという思いもあります。そこで海外からの誘客をどうするか、具体的には何かのテーマをきっかけに来ていただいた方に、「ひょうごフィールドパビリオン」を結び付けていくという取り組みが大事だと思っています。

今年の6月には、世界銀行が「防災グローバルフォーラム」を姫路で開催します。フィールドパビリオンの中には、三木市にある防災施設やHAT神戸にある人と防災未来センターという防災関連のフィールドパビリオンもあるので、そういったところにエクスカージョンで行ってもらったり、それ以外の農業や食でもいいのですが、そこをどうつなげていくかという取り組みもあると考えています。いかに興味がある方々に来ていただくか。そのあたりを含めて個別のロードマップをつくっていくことが大事だと思っています。

稲田 例えば、若い世代にどう関心を持ってもらうか、訴求力をどうするのかという具体的な例が出ました。確かに国際会議の際にそこに来る人たちに対してエクスカージョンを実施して、実際に兵庫の中身を見せていくというのは、非常に訴求力があります。

論点3

拡張万博による関西好循環の可能性

稲田 先ほど兵庫県での好循環の話をされましたが、それは関西でも実現できるのか議論したいと思います。

論点2では、地域コンテンツを組み合わせたツアーを兵庫県内だけではなく関西広域に展開することで、さらに経済効果が高まるという示唆も出ました。例えばものづくりに興味のある方には、地場産業や町工場の見学・体験ツアーなども考えられます。これはオープンファクトリーと呼ばれるもので、府県の枠を超えて広域に連携することができれば、もっといろいろな効果も出てくるでしょう。

兵庫県の取り組みでは、万博関連の連携として関西だけにこだわらず、知事をもっと広域を想定されていて、共通のテーマ・分野で観光の広域化も進められているということは、他府県も非常に参考になろうかと思っています。

それから知事が強調しておられたのが、兵庫県版テーマウィークとして「災害からの創造的復興」と、創造的復興サミットに向けて東北三県と連携されているということですが、まさに、万博のテーマである「いのち」をいかに守り、復興の中で「いのち」をどう輝かせるかということと非常に親和性があります。このあたりを兵庫県から発信していこうとされているのだと思うのですが、齋藤知事の考えをお聞かせください。

齋藤 近隣府県等との連携は、強くこれからやっていきたいと思っていることで、既にこの数年で種を蒔かせていただいているところで。関西全体が連携しながらやっていくことは非常に大事で、既に関西広域連合で連携しています。具体的には、関西パビリオンをみんなで作るなど、既に結実しているところもありますが、私はもっと越えて日本中をつなげていきたい、そのハブに兵庫県がなりたいという強い思いがあります。

近隣府県とのつながりは、単に観光だけでつなげていくということではなく、何か共通のテーマでつなげていくことがすごく大事だと思っています。香川県とは芸術・文化という切り口で、あと瀬戸内海でつながっていますから、そこで交流、つながりをつくっていききたい。具体的には美術館の連携プロジェクトで、安藤建築を切り口にして瀬戸内国際芸術祭とのつながりを何かつくっていけないかと考えています。

それから、生物多様性も非常に大事なポイントです。昨年、新潟の佐渡にも行きました。万博に向けて、コウノトリとトキの野生復帰を軸にして、万博の期間中にそれぞれの取り組みを発信していきたいと考えています。

それから、社会における防災力の強化と、復旧や復興をいかにしていくかということが恐らく問われていますので、そこを日本が万博の期間中にいかに発信できるかということも注目されていると思います。創造的復興を切り口にして兵庫にみんなが集まってきたら、創造的復興、災害前よりもより良い社会をつくっていくということについてみんなで話し合っ、行政や政治だけではなくて若い世代、子どもたちも含めて、民間の方々も入っていただき、みんなで考える機会をぜひつくっていききたいと思っています。

稲田 「ひょうごフィールドパビリオン」の他府県への普及については、関西全域に広げ、また関西経済の好循環につなげるかが課題で、そのより具体的なところを議論しながら詰めていくことはとても大事だと思っています。そのためには兵庫県内の地域がつながることが非常に大事だと思います。それからコンテンツの「磨き上げ」も大事で、成功事例を一つでも多く兵庫でつくっていただいて、それを関西広域に広げていくということが重要かと思っています。

万博会場だけでは経済波及効果は限定されます。それを関西に、広域に広げましょうというのがわれわれの共通理解であったと思います。

今の万博は課題解決型なのです。その意味で万博開催が関西経済、日本経済の反転に向けてのチャンスであり、関西経済の反転を実現するための大きな将来投資であって、その収益率を高めましょうということが、今日の議論の一つのねらいであったと思います。

齋藤 最後にもう一言。拡張型万博が本当に大事だと思っています。夢洲の万博会場の広さは、ドバイ万博と比べると3分の1程度になります。それが「ひょうごフィールドパビリオン」、拡張型万博を目指した理由の大きな要素です。

ある種コンパクトな万博になりますから、そこを回るだけで国内外から来る方々が満足されることがベストではあるのですが、万博以外にもいろいろな日本社会を見てみたいと思われる方が多いと思います。もちろんいろいろな最先端の技術などを発信することも大事ですが、もっとリアルな世界での日本社会の現状と、それをどう解決していくのかという姿を生で見てみたいという人が、実は多いのではないかと。それを提供しないと、大阪・関西万博に来て夢洲の会場を見ただけ

では物足りないのではないかとというのが、私の仮説でした。

「ひょうごフィールドパビリオン」を提供させていただき、兵庫県で土の匂いや人の息づかい、ものづくりの状況、地域コミュニティといった五感で感じる本当にリアルなものを見ていただきたい。人類共通の社会課題、人口減少社会になる中でいかに地場産業の持続可能性に挑戦していくのかといった姿を提示することによって、各国・地域の人がそれを見て、自分たちの取り組みや分野においてもいづれ同じような課題が出てくるのだ、この兵庫の取り組みを持ち帰ってわれわれも実践してみようということにつなげていくことができれば、「ひょうごフィールドパビリオン」は成功と言えると思っています。このことを私の強い思いとして、最後にお伝えしておきたいと思います。

ご登壇者 略歴

齋藤 元彦 氏

兵庫県知事 (第53代)
 2002年 総務省入省
 2010年 佐渡市総合政策監
 2014年 宮城県財政課長
 2018年 大阪府財務部財政課長
 2021年8月～ 兵庫県知事 (第53代)

入江 啓彰 氏

近畿大学短期大学部教授
 2008～11年 (財)関西社会経済研究所
 (現アジア太平洋研究所) 研究員
 2011年 近畿大学 世界経済研究所助教
 2012年 近畿大学短期大学部講師
 2016年 近畿大学短期大学部准教授
 2022年 近畿大学短期大学部教授 (現職) 博士 (経済学)

稲田 義久

APIR 研究統括兼数量経済分析センター センター長
 甲南大学名誉教授
 1984年 神戸学院大学助教
 1995年～ 甲南大学教授 同大学経済学部長、学長補佐、副学長等を歴任
 2014年～ APIR 数量経済分析センター長 (現職)
 2019年～ 同研究統括を兼任 (現職)
 2021年 甲南大学名誉教授 博士 (経済学)

APIRフォーラム 景気討論会 レポート 2023

発行日：2024(令和6)年3月

発行所：一般財団法人アジア太平洋研究所

〒530-0011 大阪市北区大深町3-1

グランフロント大阪 ナレッジキャピタル タワーC7階

Asia Pacific Institute of Research

Tel.06-6485-7690 Fax.06-6485-7689

URL <https://www.apir.or.jp>

発行者：小浪 明

ISBN 978-4-87769-705-1

賛助会員・メールマガジン配信のご登録は
こちらよりどうぞ！

